

朽ちる国立大進まぬ改修

予算不足 5年計画最終年で61%

全国の国立大で、施設や設備の老朽化が加速している。朝日新聞と河合塾が今夏に実施した共同調査で質問したところ、回答した国立大75校のうち87%に当たる65校が、改修が進まない老朽化施設があるとした。教育や研究に影響が出ているケースも目立つ。

▼29面||細る交付金

ひらく
日本の大学

朝日新聞・河合塾共同調査



温室を支える鉄骨の腐食などで危険として公開が休止されている北海道大学植物園のガラス温室11月1日、札幌市中央区

調査への回答で、多くのデータを示して苦境を訴えたのが北海道大(札幌市)だ。観光地となっている北大植物園は昨年4月から、築43年のガラス温室の一般公開を休止。鉄骨の柱が腐食するなどして、地震時にガラスが割れたり倒壊したりする恐れがあるためだ。

北大北方生物圏フィールド科学センター植物園の中村剛准教授によると、温室での学生の実習を取りやめ、貴重な植物を保全する機能にも悪影響を与えているという。建て替え費用は10億円規模になる見込みだが、大学は利用者が多く耐震補強など緊急性が高い物件を優先しており、工事のメドは立っていない。

北大では、築25年以上たつ未改修施設が全体の3分の1近い25・3%(甲子園球場の6倍超)、

築45年以上が10・6%もある。年間修繕費は2025年度で8・2億円を超える。

どが保有する建物のうち、築50年以上を経過した面積が27%、築60年以上も8%を超える。

政府は老朽化する大学施設の改善を「最重要課題」と位置づけ、文科省は国立大などについて「5か年計画」を策定。2125年度には1兆円余りを投じ、860%の改善を目指す。だが、財源の中心である施設整備費補助金は毎年1千億円程度しかなく、計画の進捗率は現在61%にとどまる。

文科省の担当者は、大学からの要望の一部にか予算を付けることができていないことを認める。「学生や教職員の安全・安心を第一に考え、耐震対策を優先せざるを得ない」と説明する。